

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

——加越能郷友会の事例——

井上 好人

1. 問題の所在

近代日本において、官吏や専門職、会社員などの近代的職業の重要な地位を占めたのは、地方から首都圏（および他都市）へ移動していった「流動エリート」たちである。とりわけ、明治後期になって旧制中学校が各地に整備され、制度的な上昇ルートが確立されるにしたがい、高学歴の「流動エリート」が数多く輩出されるようになる。遠く故郷を離れ、地理的移動を重ねてきた彼らは、学窓や職場の係累のほかに、一体、どのような社会的ネットワークを形成していたのだろうか。彼らのコミュニケーションの通路は、異なる職業集団との間で、あるいは故郷—赴任地との間で、どの程度開かれていたのであろうか。

このような問いは、戦前の中流階級の構造化と統合性の問題⁽¹⁾を検討する有効な切り口であると思われるが、これまでのエリート研究は、輩出と配分・地位形成という“移動”過程に重点が置かれ、ライフコースを通して形成される文化や意味世界の分析は十分になされてこなかった。おそらく、この課題が、特定の組織エリート（財閥・官僚・軍など）や中・高等教育機関の卒業生を対象にただけでは捉えにくい性格をもつためであり、例えば、知識人サークルとしての欧米のクラブやサロンのような、各人の自発的な参加によりグループを構成していた職種横断的組織を分析の俎上に乗せる必要があるように思われる。

有力な候補として、明治中期頃から各県の同郷出身者が集まって発足するようになった「郷友会」（「県人会」「同郷会」とも呼称）組織があげられるだろう。分析対

象としての魅力は次の点にある。第一に、同会は、「懇親会」のイベントへの参加や機関雑誌への関与を通して、同郷とはいえ互いに異なる出自をもち異なる職種に就く人々の感情的な結合と団結を促してきた組織であることである。第二に、同会は、1880年代から大学生を中心に流行する「懇親会」や「同窓会」の同郷人グループを端緒としているものが多く、高学歴の流動エリートを多数会員に有していた。ゆえに様々な近代セクターへ進出した人々のコミュニケーションの様相が集約的に捉えやすい点である。第三に、同会の多くは、発足後、戦前期まで続いており、比較的長いスパンで世代間のネットワークの様相の変化を捉えられることある。

郷友会を対象にした先行研究は少なく、川西（1992, 1996）、竹永（1985）の先駆的調査のほか、成田（1998）がある。成田は、エリートの若者たちが集まる都市空間を「故郷」を語り演じられ創出される空間として捉え、郷友会活動と機関雑誌の言説が「故郷」を再構成させ、国民国家形成に大きな役割を果たしてきたとしている。だが、郷友会活動に参加する／しない人々の意味世界やネットワークの様相には不問のままであり、“故郷”言説だけから同会が同郷人を統合し方向づける強い機能を果たしてきたことを示唆するのは拙速であろう。むしろ事態はその反対で、機関雑誌上で賑やかに語られる「故郷」や「県人論」は、流動エリートたちの不安や焦燥を、さらには彼らの統合性の無さを物語っているかもしれないのである。

小論が取り上げる郷友会は、旧加賀藩ゆかりの「加越能郷友会」（加越能地域：現在の石川県と富山県）である。同会は、全国的な郷友会・同窓会の設立ブームの渦中に設立された「久徴館同窓会」（1888（明治21）年設立）を母体として、1896（明治29）年に「加越能郷友会」と名称変更され戦前まで続く組織である。会員数も明治三十年代に一千名、機関雑誌の発行部数も一千五百部を越え「他の郷友会発行の雑誌に於いて其比を見ざる処」（『加越能郷友会雑誌』125号, 1900年）であった大組織を誇った。また、設立の経緯と会員構成の特徴が、他県の多くの郷友会組織がそうであったように、在京の学歴エリートとそれを庇護する旧藩主（前田家）を水脈とする組織であったこと、加越能出身者ならば誰でも会員になれる開かれた組織であったこと、という性格をもっており、日本の近代化過程における流動エリートの文化的側面を捉えるためのひとつの典型を提供してくれるだろう。そして、次のような点から上記の課題に迫ってみたい。

1. 多様なタイプの流動層が加越能郷友会に参集していたのか。もし、そうでなければ、一体、誰が“背を向けて”いたのか。明治期に地元の中高等教育機関を卒業した世代（石川県立金沢第一中学校と石川県立農学校の卒業生）を対象として、族

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

籍、学歴、職業、そして地理的移動パターンから会員／非会員の特徴を分析する。

2. 会員相互は、郷友会活動によって、どの程度幅広いネットワークを構築していたのか。特に、世代間、異職種間、および地方－中央間の交流について、統計資料のみならず機関雑誌上での議論も俎上にのせ、人々の主観的な意味世界を問いながら明らかにする。

なお、石川県立金沢第一中学校（「金沢一中」）と石川県立農学校（「農学校」）の卒業生から郷友会ネットワークをみる理由は次のようなものである。金沢一中は、1893（明治26）年創立以来、高学歴の流動エリートを多く輩出してきた名門校であり、また加賀藩ゆかりの士族の子弟が多いので、旧藩主を（名誉）総裁に仰ぐ郷友会の主力メンバーを構成していたのではないかと推察されるからである。これに対して、農学校は、1877（明治10）年設立の石川県農事講習所を端緒とする全国的にも古い歴史をもつ農業科・獣医科の中等教育機関である（1926（大正15）年より石川県立松任農学校）。豪農地主階級の子弟が多く在籍し、卒業後は家業を継ぎ“田舎紳士”となる者のほか、県内外の農政・技術系官吏や会社員といった中等学歴の新中間層も多く輩出してきた。金沢一中と対照的なタイプの中等教育機関を経て各職業階層へ編入されていった人々の動向が捉えられよう。なお、明治期の金沢一中卒業生の動向については、既にデータベース化しておりこれを利用することとする⁽²⁾。

加越能郷友会関係の資料としては、まず、1888（明治21）年以降刊行されてきた機関雑誌がある。雑誌名は次のように何度か変更されている。『久徴館同窓会雑誌』1号～84号（1888年7月～1895年12月）、『加越能郷友会雑誌』85号～203号（1896年4月～1907年10月）、『加越能時報』204号～375号（1907年11月～1924年3月）、『加越能郷友会会報』1号～60号（1924年5月～1938年2月）。（以下、『久徴館』、『雑誌』、『時報』、『会報』。）次に、会員名簿類は、「会員名簿」『加越能郷友会雑誌』124号（1899年）、「加越能紳士録」『加越能時報』237号（1911年）、「加越能郷友会名簿」『加越能郷友会会報』34号（1931年）。（以下、「M32名簿」,「M44名簿」,「S 6名簿」。）これらに、金沢一中と農学校の卒業生データを組み合わせ、郷友会会員／非会員を中等教育機関卒業後の移動履歴にも着目しながら重層的に捉えたい。

2. 加越能郷友会の起源と理念

加越能郷友会は、上京した加越能地域出身学生の寄宿舎である「久徴館」（1882（明治15）年～1895（明治28）年）の同窓生によって設立された「久徴館同窓会」（1888年設立）を母体としている。（久徴館は、北条時敬をはじめとする上京学生の有志8

人によって創立されたが、1886（明治19）年に前田家の「育英会」（のちの「加越能育英社」）の管轄になり、旧藩主との繋がりが太くなった。同館が廃止された後、1908（明治41）年に「明倫学館」として新築再興される。）

会員資格は、当初、「在久徴館々長取締及学生」および「曾テ久徴館ニアリタル取締及学生」であったが、後に、「賛助会員」が設けられ「加越能三州人ニテ本会ヲ賛成シ之レニ加盟シタル者」と加賀・能登・越中（現在の石川県と富山県）出身者全てに開かれた組織となる。とはいえ、会長職などを務めた早川千吉郎（東大→大蔵省、三井銀行専務理事）や中橋徳五郎（東大→農商務省、文部大臣）の経歴に象徴されるように、同会は多くの学歴エリートを会員に有していた。

目的として「加越能人士の団結」が謳われ、春秋の2回の「大親睦会」の開催と月1回の雑誌発行が行われた。機関雑誌は、学歴エリートの卒業後の教養サークルとして意味づけされており、また、「同郷」という用語が早くから使われ、同郷人の団結の強弱が常に問われることも特徴である。例えば、『久徴館』1号で早川千吉郎が「久徴館同窓会開会ノ小言」として「世人或ハ云フ加能越ノ人種ハ集合力ニ乏シト予未タ之ヲ信セサルナリ蓋シ本会ノ盛衰以テ之レヲトスルニ足ルカ諸子ニ代リ聊カ小言ヲ陳ス」と述べているように。

このような、「懇親会」の開催、雑誌上での論説と消息記事にみられる「故郷」・「団結」・「県人論」の訴え、というパターンは他県の郷友会機関雑誌の場合と共通するものであり、戦前期に至るまで踏襲されるのである。

3. 誰が会員になったのか

3.1. 会員数の増加と停滞～明治期から昭和初期へ～

ある組織・団体の隆盛度が組織員数をメルクマークにして測られるとするならば、加越能郷友会はその発足以来順調な発展を遂げたのだろうか。明治期から昭和初期に至る会員数の変遷を見てみよう。

久徴館同窓会時代の1891（明治24）年にはすでに600人近くの会員数を擁し、その後、1895年：986人、1896年：1008名、1898年：年867人、1899年：1047人、1900年：1198人、と明治の半ば過ぎには千名を超える会員数を誇るようになった。ところが、1931（昭和6）年の会員数は1214人である（大正期は不明）。周知のように明治末年から学歴エリートが急増する。高等教育機関在学生徒数は、1903年→1920年の期間に総数で2.5倍に、大学に限ってみれば4.9倍に増加しているし、また1903年→1930年の期間では、総数で5.6倍に、大学に限ってみれば15倍に増えている（『近代日本

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

教育史事典』より算出)。これに伴い「流動エリート」の数も増大していたはずにも関わらず、会員数は横ばいのままであった。

低迷の原因は何だったのか。新しい世代の加入が減ってきたのか、あるいは、脱会者が相当生じていたのだろうか。また、人々にそのような意志選択をさせた理由は何だったのだろうか。

3.2. 1931（昭和6）年の会員1214人の「移動パターン」と職業

昭和初期の郷友会員の経歴や職業の特徴を、「S6名簿」の1214人を対象に描出してみよう。同名簿の配列は、東京（横浜などの周辺部も含む）在住の「在京会員」が前半部を占め、それ以外を「地方会員」として後半部にまとめて収められている。会員ごとに、出身地、現住所、職業の記載があるが、族籍は記載されていない。(1214人中、出身地のみの不明者52人、現住所のみの不明者2人、出身地・現住所両方の不明者1人が含まれている。以下、比率の算出においては不明者を除外する。)

まず、この「1214人」を現住所からみると、東京が906人(75%)を占め、同じ都市部でも、大阪、京都、神戸の京阪神地域は74人(6%)にすぎない。また、地元(石川県・富山県)在住はわずかに84人(7%)である。東京在住に構成が偏っているのは、同会の起源が上京エリートのための組織であったことと、地元や地方に威信の高い職業が少ないという地位構造とを反映しているためであろう。彼らのネットワークは地理的な横の広がりという点で歪があったのである。また、出身地からみると、過半数の645人(56%)が金沢で占められ、石川県郡部からは247人(21%)、富山県からは246人(21%)である。(そのほか、23人がおそらく転籍などによって出身地が東京をはじめとする石川・富山県外となっている。)

次に、現住所と出身地から地理的移動のパターンを、「都市流動」、「地方流動」、「外国流動」、「北陸定着」、「都市定着」と分類し、出身地別にそれぞれ整理したのが表1である。(ここでは、「都市」を東京とその周辺地域、および京阪神地域とし、「地方」をこれら以外の地域とした。)すると、「都市流動」者が全体の80%を占めている反面、金沢以外の“田舎”(郡部・富山)出身で地元で定着していた人々が郷友会とは最も疎遠であることがわかる。

職業別では、全体の65%が公務・自由業(官吏198, 軍人143, 専門職266), 28%が会社員(297), これらを合わせて新中間層が85%を占めている。これに対して、自営業(151, 12%)や農業(3, 0.2%)といった旧中間層は少数であった。

表1 郷友会会員の出身地別「移動パターン」(昭和6年)

出身地		移動パターン					計
		流動			定着		
		都市流動	地方流動	外国流動	北陸定着	都市定着	
石川県	金沢	500(78%)	55(9%)	31(5%)	58(9%)	0(0%)	644(100%)
	郡部	227(83%)	18(7%)	11(4%)	18(7%)	0(0%)	274(100%)
富山県		191(88%)	13(6%)	6(3%)	8(4%)	0(0%)	218(100%)
他府県		5(22%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	18(78%)	23(100%)
全体		923(80%)	86(7%)	48(4%)	84(7%)	18(2%)	1159(100%)

4. 会員への道のり～金沢一中と農学校卒業生の比較から～

次に視点を変えて、郷友会ネットワークに参画する人々の特徴を、明治期に金沢一中と農学校を卒業した人々のその後ライフコースにおける郷友会との関わり、という観点から検討してみよう。なお、照合する郷友会名簿は「M44」と「S6」の2時点であるが、明治末期では卒業後間もない青年期、昭和初期においては推定年齢が40歳～55歳、職業的な到達地位がほぼ固まり、種々の社会的ネットワークが最も緊密である時期、という特徴がある。

4.1. 金沢一中の場合

金沢一中卒業生(卒業年度は1894(明治27)年～1909(明治42)年、総数1016人)のうち石川・富山両県出身者は、どの程度郷友会員に名を連ねているのだろうか、「S6名簿」と照合してみよう。すると、昭和6年時点で死亡者を除く生存者は721人いたが、そのうち会員は66人で会員率9.2%であった。(以下、「721人」、「66人」と記す。)

卒業年度別の会員率を算出しグラフ化してみたのが図1である。初期の卒業生(明治三十年代初頭)が最も会員率が高く(25%)、卒業年度が下るにしたがい顕著に会員率が低下している(5%以下)。世代が下るに従い郷友会に無関心になる傾向があるのは、さきにみた郷友会全体の会員数の伸びが低迷した事情を物語っている。

では、「721人」の、会員になる／ならない(66人／655人)という各人の意志選択が、「出身背景」や「経歴」のどのような要因と関連があったのだろうか。利用できる指標として、「出身背景」は、族籍、本籍地、また、「経歴」は成績(中学卒業時点)、最終学歴、職業(昭和6年時点)、をそれぞれ用い考察してみよう。(「職業」

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

は、金沢第一中学校同窓会編「同窓会員名簿」(1931年)に依る。)

まず、出身背景との関連の有無について調べよう。族籍別、本籍地別に会員輩出率をまとめたのが、表2である。これによると、族籍別の輩出率(士族/平民=0.10/0.09)においても、本籍地別の輩出率(金沢市/郡部/富山県=0.10/0.08/0.09)においても、差異は認められない。族籍、出身地域を指標とした場合、会員になるのか否かという選択行動については、出自との相関はないのである。

図1 金沢一中卒業生・卒業年度別郷友会会員輩出率(昭和6年)

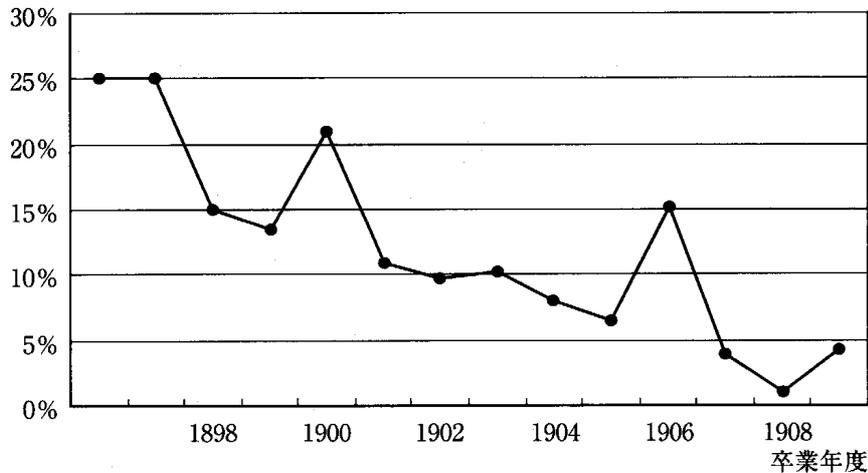


表2 族籍と出身地域別の会員輩出率

族籍	会員	非会員	計	輩出率
士族(含華族)	33	304	337	0.10
平民	33	350	383	0.09
計	66	654	720	0.09

本籍	会員	非会員	計	輩出率	
石川県	金沢市	46	432	478	0.10
	郡部	17	191	208	0.08
富山県	3	32	35	0.09	
計	66	655	721	0.09	

加越能郷友会が、士族を中心とする上京学生集団からスタートし、旧藩主を名誉総裁として仰ぎ財政的な支援も受けてきた経緯をみれば、士族からの加入率が高いと想像されようが、実際はそうではなかったのである。機関雑誌の議論をみても、士族/平民の別に対する関心は皆無であることからしても、郷友会は、むしろ平民が積極的に加入して旧身分関係を無化し、学歴エリートとしてのアイデンティティ

を互いに確認・形成する空間として機能していたとみることができるだろう。

次に、経歴との関連性をみてみよう。表3-1より、中学卒業時の成績による会員輩出率の差は微妙である。「席順ランク」(卒業時の成績席次を五等分し、優秀者から順に「ランク1」→「5」に分類したもの)の最も高いグループからの輩出率は0.18と高くなっているが、以下のグループについては明確な違いはない。これは成績が卒業後の進路と一定程度リンクしているため、それらの相関の影響(疑似相関)である可能性がある。

そこで、最終学歴と職業との関連をみたのが、表3-2と表3-3である。これによれば、まず最終学歴では、帝大と軍関係学校からの会員輩出率が高く(それぞれ0.19, 0.12)、反対に、私学や「進学せず」(中等学歴)からは非常に低い(0.04, 0.02)。両学歴の相違によって輩出率は3~9倍ほど格差があるのである。また、昭和6年時点の職業からみると、軍人、教員、官公吏からの輩出率が高く(0.14, 0.13, 0.12)、反対に、商工業や農業従事者からの輩出率は非常に低い(0.02, 0.

表3-1 中学卒業時の席順ランク別輩出率

席順ランク	会員	非	計	輩出率
1	26	116	142	0.18
2	6	130	136	0.04
3	15	128	143	0.10
4	10	134	144	0.07
5	9	146	155	0.06
不明		1	1	—
計	66	655	721	0.09

表3-2 最終学歴別輩出率

最終学歴	会員	非会員	計	輩出率
帝大	35	145	180	0.19
軍学校	11	84	95	0.12
官公立高等専門学校	14	191	205	0.07
高等学校	1	17	18	0.06
私学	3	67	70	0.04
その他		9	9	—
進学せず	2	108	110	0.02
不明		34	34	—
計	66	655	721	0.09

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

表 3-3 職業 (19312 (昭和6) 年) 別輩出率

職業分類(昭和6年)	会員	非	計	輩出率
軍関係	9	57	66	0.14
教員	8	53	61	0.13
官公吏	13	97	110	0.12
会社員	14	125	139	0.10
専門職	9	107	116	0.08
商工業	1	40	41	0.02
農業		21	21	0.00
その他	6	48	54	0.11
不明	6	107	113	0.05
計	66	655	721	0.09

表 3-4 最終学歴「帝大」の職業別輩出率

最終学歴	昭和6年時の職業	会員	非会員	計	輩出率
帝大	官公吏+軍関係	11	32	43	0.26
	それ以外	24	113	137	0.18

注) 「それ以外」の職業における「元」官公吏である可能性を否定しない。

00)。

ところで、学歴と職業との間にも少なからずの相関があったと思われるが、どちらか一方のみの要因が強かったのだろうか。これを検証するために、学歴要因で最も輩出率の高かった帝大出身者について、職業別に輩出率を算出したのが表3-4である。「官公吏+軍関係」からの輩出率は0.26と他の職業(0.18)に比べ非常に高く⁽³⁾、帝大卒という学歴要因のみが強く働いていたわけでないことがわかる。

つまり、名門中学出身であるというだけで、郷友会員になろうとする選択の機会が平等に開かれていたわけではなく、卒業後の学歴と職業の履歴が強く影響を与えていたのである。いいかえれば、郷友会は、「帝大を出た官僚や大学教員」あるいは「軍学校出の将校」の経歴の持ち主が加入するところであって、そうでない者にとっては何となく縁のない組織だった、という雰囲気があったことが想像できる。

4.2. 農学校の場合

次に、農学校卒業生の場合をみてみよう。金沢一中データと卒業期間を揃えるために、1893年～1909年の卒業生616人をピックアップした。ただし、このうちには加

越能地域外の出身者や各調査時点ですでに死去している者が一定程度含まれているはずだが、これを弁別する資料はない。さて、「M44」と「S6」の2時点で郷友会会員となっている者を照合してみると、1911（明治44）年時点で会員であった者は誰もおらず、昭和6年時点でわずか8人のみであった。この8人のうち職業不明2人を除きすべてが出郷した「流動」新中間層である（表4）。

表4 石川県立農学校卒業生の加越能郷友会会員（明治44年→昭和6年）

M44→S6	卒業年度	氏名	学科	出身地	S6居住地	S6職業
会員→会員	該当者無し					
会員→非会員	該当者無し					
非会員→会員	1895	HS	農学科	金沢	神戸	不明
	1898	YY	農学科	能美	山形	山形県農林主事
	1901	SE	獣医学科	珠洲郡	東京	山手信用購買組合理事長
	1903	ST	農学科	河北郡	東京	東邦火災
	1903	YN	農学科	羽咋郡→金沢	東京	不明
	1904	AY	獣医学科	能美郡→金沢	大阪	大阪商船(株)
	1905	AK	獣医科	金沢	東京	復興通信社
	1907	YU	獣医科	金沢	朝鮮	朝鮮総督府

その一人SE氏のプロフィールをみよう（出典：『石川県立農学校・石川県立松任農業高等学校九十年史』（1966））。彼は、珠洲郡内浦町の農家の次男である。「次男に生まれ家には無用扱いになってい」たので、当時の中等教育機関（金沢一中、師範学校、県立工業学校、県立農学校）のうち「やむなく小松の農学校を選ん」だ。家から毎月5円の送金があったから裕福な家庭であったのだろう。卒業後に滋賀県官吏として就職、「月給25円と旅費18円の腰弁当の小官吏になった」。一年志願兵、日露戦争への従軍を経て、滋賀県官吏に復職、そして東京警視庁へ転職、関東大震災にあうも復興後、消費組合（後、信用金庫）を設立し昭和期を迎えている。

彼は、農学校同窓会の関東支部設立の中心人物のひとりであった。この事情がなければ、農学校出の「流動」新中間層という人生を歩んだ彼を含めた多くの卒業生にとって、郷友会は縁遠いものだった。金沢一中卒業生の場合と会員輩出率の格差を算出してみると、昭和6年時点で、およそ50倍もの格差があったからである。（算出方法は、「616人」には死亡者や他府県出身者も含まれているので、金沢一中の場合もこれらの数を分母に含めた。すると、農学校： $8/616=0.013$ 、金沢一中： $66/1016=0.65$ 。）つまり、農学校出身者、延いては中等学歴の新中間層の人的ネットワ

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

ークは、高等学歴のエリートとは疎遠なところで形成されていた可能性が高いのである。

5. 「流動エリート」の不满と不安～制度化に伴うジレンマ～

5.1. 郷友会に背を向ける人々

前節で、郷友会の中核を占めた人々の典型的なプロフィールとして、「帝大を出た官僚や大学教員」あるいは「軍学校出の将校」が析出され、これと同格でない人々とはネットワークを異にしていたことが示唆された。だが、相応しい学歴や社会的地位をもちながら、郷友会の非会員を買いたり、途中退会したりした人々は少なかつたようだ。金沢一中卒業生の場合、(昭和初期までの生存者のうち)明治期は郷友会員だったのに、その後退会(名簿に未記載)の者は15人いるが、この数は昭和初期まで継続会員だった者(8人)より多いからである。

両者のプロフィール上の違いはあるのだろうか。表5は、「M44名簿」と「S6名簿」によって両時点の会員／非会員のパターンを一覧にしたものである。継続会員8人と途中退会者15人のプロフィールを比較してみても、最終学歴や昭和6年時の職業に遜色はない。職業的な地位の失墜により退会、といった個人的な事情が多く発生していた証拠は見あたらない。とすれば、郷友会の活動に内在する要因により、会員であることに意味を見いだせなくなった人々が少なからず輩出されてきたのではないだろうか。実は、会員数がピークを迎えた明治三十年代初頭でさえ、「其会員はよく同郷人の全体否少なくとも知名の士の大半を網羅せりと云うを得べきか嗚呼何ぞ夫然らん」『雑誌』116号、1899年)と指摘されていたように、郷友会は同郷のエリートを包括できていなかった。非会員を買った人物を挙げれば、藤井健次郎(東京帝大教授。植物細胞遺伝学者のパイオニアで、昭和25年文化勲章受賞)がそうである。藤井は、1908(明治41)年、加越能郷友会の記者が取材に訪れた時、「私は自分の職務のために教授時間外でもはなはだ多忙で」と冷たく断わり非会員を買っているように、「郷土とのつながりはあまりない」(『石川百年史』598頁)。彼のような無関心派を、『雑誌』は「自己が先天的に有する所の地方的感情を強て消滅せしめんとする者」とみなしていた。“望郷の念”だけで同郷連帯の意識が稼働しネットワークへの取り込みが行われるには限界があったのである。

このように、高学歴の流動エリートといえども、郷友会を通じたネットワークの粗密の程度の差は大きかった。ではなぜ、このような事態が生じていたのだろうか。

表5 金沢一中卒業生・「M44」→「S6」への会員/非会員のパターン

M44→S6	整理 番号	卒業 年度	氏名	族籍	本籍地	居住地	昭和6年時の職業	最終学歴
会員→会員	14	1897	HT	平民	郡部	東京	陸軍少将・陸軍造兵廠 作業部長	陸軍士官学校
	67	1897	OO	平民	金沢市	京都	陸軍少将(予備役)	陸軍士官学校
	114	1898	TK	士族	金沢市	山口	岩国中学校校長	東大・文
	130	1900	HM	平民	富山県	神奈川	海軍少将(予備役)	東大・理
	153	1902	IB	士族	金沢市	東京	前田侯爵家理事	東大・法
	455	1902	TY	士族	金沢市	東京	不明	東大・法
	551	1902	SY	士族	金沢市	東京	東京電気(株)技師・販売 部長	東大・工
会員→非会員	1011	1906	MY	平民	富山県	外国	トルコ日本大使館参事 官	神戸高商
	163	1895	NH	平民	富山県	石川県	不明	東大・法
	329	1898	MT	士族	金沢市	北海道	開業医	金沢医学専門学校
	367	1898	AS	士族	金沢市	千葉県	千葉県佐原中学校教諭	東大・理
	374	1899	OJ	平民	他府県	東京	宮内省事務官	東大・法
	400	1899	YK	士族	金沢市	静岡	東洋モスリン会社医	金沢医学専門学校
	405	1899	TK	士族	金沢市	東京	東京帝大教授	東大・工
	479	1900	TY	平民	郡部	石川県	海軍少将(予備役)	海軍兵学校
	649	1902	KS	平民	金沢市	不明	会社員	東京高商
	683	1903	FT	士族	金沢市	東京	内務省土木局内務技師	東大・工
	720	1903	FT	士族	金沢市	石川県	海軍大佐(予備役)	海軍兵学校
	742	1904	TG	士族	金沢市	外国	大連・辰巳商会	東京美術学校
	745	1904	YS	士族	金沢市	神奈川	石炭会社	東亜同文書院
	784	1905	MS	平民	金沢市	石川県	陸軍少佐(予備役)	陸軍士官学校
	833	1905	MR	士族	金沢市	神奈川	横浜税関監視部長	東大・法
1079	1906	TS	平民	郡部	大阪	大阪宗建築事務所	東大・工	

注) 上表のパターンのほか、「非会員→会員」のパターンの者は58人いる。

5.2. 懇親会の不満と団結への希求

藤井のような「地方的感情」を社会活動の中に位置づけしない「無関心派」とは別に、実際上のメリットを期待し裏切られる「失望派」も相当発生していたのである。明治後期以降の『雑誌』上に頻繁に表れる次のような論争から、会員たちの主観的意味世界を探ってみよう。

まず、機関雑誌の存在を無意味だと見なす人々が多かったことである。「論叢」欄が「秋天の萤火」状態なのは、「吾人の如き今や社会に於て如此地位を有し、如此学

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

識あり、一地方の雑誌に投書するか如きは元予輩の好む所にあらず」とか、「彼か如き雑誌に投書するも果して何の価値かあらんや」などといった冷たい評価を多くのエリートが下していたからである。次に、懇親会への不満である。春秋2回催される懇親会は、「殆んど其会の目的上何等得る所なかるべき」結果に終わっていたからである。「如何んとなれば、一度大会に於て初対面の栄を得交際の端を開くも其后相会するの機会なきか為に之を持続するの道なきか故なり、故に郷友会員として其名簿に名を列するあるも其大半は相互に相知らざる者のみ、之豈同郷人の親睦を計ると称する本会の目的に添ふものならんや」（島村他三郎「所謂地方的感情を論じ郷友会に対する吾人の希望を述ぶ（承前）」『雑誌』116号，1899年）と手厳しい。このように会員たちが望むメリット（報酬）として、“郷愁の慰み”以上に新たな人脈・コネの開拓という願望が大きかったわけだが、一方、その対価として会費のみならず、藤井が断りの理由としてあげた「機会費用」もばかにならない。この報酬／費用の差引勘定について、会員たちの主観価値はどう判定していたのだろうか。

機関雑誌の「論説」には、頻繁に「加越能人士の団結」を謳う主張が登場し、「同郷」という語も同郷意識の高揚や相互の団結の強さを問いかける意味で用いられている。懇親会の報告記事をも、*「歓笑の聲座中に溢る」*などと会の盛況ぶりが伝えられ、「同心協力」と「我郷の勢力をして天下に冠たらしめんこと」が再三謳われている。ところが、記事を子細に読めば、特に若い世代の会員たちの苛立ちと不満が噴出していたことに気がつく。

例えば、1900（明治33）年の春季懇親会に参加した「憤慨生」は、出席者の主流が学生と実業家であり陸海軍や文官の参加者が少ない、あるいは、「新顔」ばかり揃い「旧顔連の少も顔を出ぬは不平でたまらぬ」、と不平を漏らしている。会員構成の主力を担っていたはずの実力者達の懇親会への無関心ぶりが「憤慨」の対象となっているのである。そして、「兎角、三州人の欠点は不一致にあるので、互いに胸襟を打開き共に談るの度量を是非起さねばならぬ」と続け、「他県の人士を御覧なさい吾か県人の如く団結力乏き者はない様である。旧百万大藩の人士が一致力の乏とはなさない事ではあるまいか」（『雑誌』128号，1900年）、と結んでいる。「三州人の欠点」とか「吾か県人の如く……」といった県民性への言及が彼らの人脈形成上の不満とリンクしているのである。この不満は、先覚者ラックを得た先輩とこれに続きたい後輩との確執として表面化する。

5.3. 世代間抗争としての「県人論」の展開

次の例は、「先輩の諸氏は己れのみ進むを知りて他あるを知らず、随つて先輩と後輩とは相吸引せずして却て反発せむとする有様なり」として先輩の「一騎駆け主義」が批判された例である。「我輩の旧知にして今は府下山の手に閑居せる元とは建具屋の倅にて刻苦勉励の末、周尾能立身し先年迄は某省に於て枢要なる一椅子を占めつゝありし男なり。兎に角加越能人士中先輩として恥しからざる人物なれば、或る時我輩其の安否を音づれむと欲し之れを訪問せり、然るに豈に圖んや下婢の取次を以て唯今差支えあれば重ねて来るべしとてすげなく門前払を喰ひし事あり。之れ一笑話とせば我輩何をか云はん、然れとも身は苟くも相応の学識経験を積み普通の知覚精神を備えつゝあるべきに、其の交際の下手さ加減に驚くと同時に多少の礼儀を知り幾分か友誼を重んずるもの、有る間敷き振舞ひと云はざる可らず」（森田霞園「加越能の先輩諸氏に望む」『雑誌』121号、1899年）。標的となった「山の手先生」とは清水澄（東大・法→枢密院議長）で、当時は内務省在官であった。

一方、後輩のこのような不満に対して、先輩からは「架空の楽に耽け」てしまっているのは「前時代を倣ふの陋劣見るに堪へざるものあり」と冷たい眼差しを向けられ、代わりに「修養」が説かれる。「修養を軽んじ成功を夢幻の如き一機に賭せんとす、其成らざるや明なり」（『雑誌』168号、1904年）と。これらの論の応酬の背景には、明治三十年代という時代、すなわち、竹内（1991）やキンモンス（1995）の指摘するように、上京の際にネットワークを持っていた「庇護型」からネットワークなしの「裸一貫型」の大量発生という事態がある。そして、立身出世機会の相対的低下を感じる苛立ちの解決を、後輩の会員たちは、心理的な「私化」（丸山、1968）や「煩悶」によってではなく、同郷コミュニティ内での社会関係樹立によって行おうとした。だがこの闘争は、不満を「修養」言説によって肩透かしする当時のおきまりのパターンを帰結してしまつたのである。

彼らのコミュニケーションを希求する心性は、新たな「倶楽部」設立への意見具申へ展開する。「一騎がけ主義を破りて団結主義を造らむ」（『雑誌』119号、1899年）との呼びかけに、郷友会幹部も「社交的ならざるべからず」（『雑誌』132号、1900年）と賛同を表し、ようやく1902（明治35）年10月、東京市四谷区に「東京加越能倶楽部」が設立される。ところが、この倶楽部も十分に機能しなかつた。新参者や官吏以外の地位にある者からすれば、「倶楽部は何となく近づき難きの嫌なきに非ず」だったからである。曰く、「今回四谷に設立せられたる倶楽部は主として軍人の団体なり、曰く軍人のみにあらざるも全く高等官吏の会合なりと、斯くの如くして老紳士の如き、学生の如き、はた官吏以外の職業を執り或は奏任以下の官職に在るもの、

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

如き、就て倶楽部のことを談するも多くは冷々淡々たるを見る、是れ実に嘆すへきことならずや」(『雑誌』157号, 1903年)と。ここでも、「自己若くは同流以外のもの、事業に同情を寄すること少く、寧ろ却て之を排斥せんとする傾向」が「加賀人の短所」として語られる。事実、同倶楽部は「目下加入の人々は僅に一局部に止まるは甚だ遺憾に堪へず」と閑古鳥が鳴いていたのであった。

このように、学歴階梯の“正系”ルートが確立し多くの上京青年を輩出するという喜ばしい事態は、アイデンティティを支える同郷の先輩たちとの社会関係構築を希薄にするというジレンマを抱えており、たとえ郷友会に加入したとしても解決は容易でなかった。このことが多くの会員を失望させ、諦めさせ、やがては郷友会に背を向けていく大きな要因としてあったのである。その意味で、加越能郷友会は、世代間の交流を深め人的ネットワークを広げていく、という若い世代に最も期待された機能を十全には果たし得なかった。この後、昭和期まで連綿と論争される「県人論」や「郷土論」は、なにがしかの世代間抗争を内包して展開されていくのである。

6. 地元資産家たちの郷友会に対する態度

前節でみたように、加越能郷友会は、総会員中、「北陸定着」(Uターンを含む)者がわずか7.2%、自営業や農業といった旧中間層も13%で、都市へ流動していった学歴エリート系の新中間層のための組織であった。そのような流動エリート中心の組織に対して、地元の富裕な名望家たちはどのような態度をとっていたのだろうか。そこで、石川県の場合について、「石川県歴代多額納税者一覧」(浅香菊太郎編『石川県資産家名鑑』所収, 1925(大正14)年)⁽⁴⁾に掲載されている同年度の資産家番付上位90人と、郷友会の「S6名簿」とを照合してみた。すると、郷友会会員であったのは、石黒伝六(金沢市, 番付75位, 納税額1182円)ただ一人のみであった。石川県「資産家」層からの会員輩出率はわずかに0.01にすぎないのである。

この事実は少々意外である。「資産家」名簿に名を連ねているのは郡部の大地主ばかりでなく、1931(昭和6)年当時金沢商工会議所会頭であった中島徳太郎(番付4位)をはじめ金沢財界の著名人も多い。彼らのネットワークは、事業のみならず社会文化活動にも手広く張り巡らされていたはずである。例えば、1934(昭和10)年設立の金沢ロータリークラブは、金沢市長・片岡安と中島の肝入りにより設立され、初年度クラブ会員25名中、「資産家」から中島のほか、米谷半平、辰村米吉、中宮茂吉、中村栄助、井村徳三郎の子・徳二の計6名が加わっている。そのような彼

らが郷友会に対して冷淡だったのは不可解である。背景に何があるのだろうか。

一方、明治期においてはどうかだったのか、「M32名簿」と「M44名簿」から顔ぶれを拾ってみよう。士族系では、本多政以、横山隆俊の旧加賀藩「八家」、宮野直道、平民系では、中屋彦十郎、森下八左衛門、亀田伊右衛門の旧「家柄町人」がおり、維新後も有力実業家として転身し旧藩と深いつながりをもっていた人々が郷友会員である。その後、横山家が没落、本多政以が死去、平民系では、森下が没落、中屋と亀田は昭和期には財と威信が低下し、大正末には、彼らと交代する形で新興実業家が台頭するようになった。中島家（紙商）は、1863（文久3）年の創業、二代目徳太郎が1885（明治18）年、旧家柄町人の邸宅を買い取りメインストリートに進出、その後、他社の買収を続けて事業を拡大。平澤嘉太郎は石川郡出身の木引職人から身を起こした材木商。田守太兵衛は富山出身の呉服商、中宮茂吉は仲買人から老舗の「森八」（菓子商・森下家）を買収。井村家（徳三郎→徳二）は小間物店から百貨店（大和）経営へ。いずれも維新後になって富を築いた“成り上がり”の家系である。他方、「S6名簿」で郷友会会員であった石黒伝六は、唯一の生き残った旧家柄町人であった（表6）。

表6 地元資産家の実業家層の加越能郷友会会員状況

(明治期)

実業家の経歴			会員	非会員
士族系			本多政以, 横山隆興, 宮野直道, 篠原讓吉	
平民系	藩政期上層町人 〔「家柄町人」・ 「豪商」〕	繁栄	中屋彦十郎, 森下八 左衛門, 亀田伊右衛 門	
		没落および低迷		木谷藤右衛門
	藩政期非上層町人・維新後の新興			井村徳三郎, 林屋新兵衛, 田守太兵 衛, 中島徳太郎(先代), 平澤嘉太郎

(昭和初期)

実業家の経歴			会員	非会員
士族系				
平民系	藩政期上層町人 〔「家柄町人」・ 「豪商」〕	繁栄	石黒伝六	
		低迷		中屋彦十郎・亀田伊右衛門
	藩政期非上層町人・維新後の新興			井村徳二, 林屋亀二郎, 田守太兵衛, 中島徳太郎, 平澤嘉太郎

このように、明治末から昭和初期に至る資産家層の交代によって、近世から明治

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

期へ引き継がれてきた権力構造に断層が生じ、加越能地域の社会的ネットワークが質的に変化したことによって、流動エリートと地元を繋ぐコミュニケーション回路が次第に疎遠になっていった。表6に一覧で示すように、明治維新後、近代化への対応に熱心だった近世以来の資産家たちのネットワークは、旧藩由来の社会関係を結節点として、出郷していった学歴エリートとも結びつきを広げようとする志向があったのに対し、その“成り上がり”の始点において旧身分関係を免れ近代思想を受容する余地の大きいはずの新興層の場合は、それほど積極的な関係を取り結ばない傾向があったのである。このことは、昭和期になって「加越能育英社」への資金援助を引き受けたのが、地元資産家ではなく、学歴エリート系資産家（金沢一中→東大、荏原製作所の創業者となった畠山一清の「畠山奨学金」）であった事実からも頷けよう⁽⁵⁾。

その理由についてここで論じる余裕はないが、郷友会構成メンバーの学歴・職業の偏向が、地方資産家層の学歴や生活世界のハビトゥスと相容れず、互いにネットワークを取り結ぶ契機が無かったことが少なからず関係しているのではないだろうか。麻生（1991）も指摘するように、地方実業家たちは「叩き上げ」で商才を身につけ成功を手中にしてきたのであり、多くは高等学歴を持たず、進学したとしても私学の高等教育機関であった⁽⁶⁾点である。例えば、林屋亀二郎でさえ中等学歴（金沢商業学校）であり、井村徳二は金沢一中卒業後、早稲田へ進学したが、中退して1920（大正9）年、家業を手伝うために帰郷している。

そもそも“成功した”エリートは“故郷に錦を飾る”ことによって、地元の人々との間に持続的なあるいは新たな社会関係を構築できるチャンスを有していた。例えば、1899（明治32）年、高岡、射水、氷見（一市二郡）出身の学生（東京帝大、四高、東京工業学校）が帰郷した際の「学生懇親会」には、市長・郡長・郡書記、学務委員、軍人が参集し、また中学生徒からの祝電が披露されている。だが、この席に農家や商工業者の顔ぶれは見あたらない（あるいは紹介されない）。（「高岡・射水・氷見学生大会」『雑誌』120号、1899年）。旧中間層との繋がりには、フォーマルな関係としては付随的なものと見られており、両者を噛み合わせる接点はなかなか見出されなかったことをこのエピソードは物語っている。

7. まとめ

小論は、明治期から昭和初期に至る間、「流動エリート」が、異業種間、世代間を結ぶどのようなネットワークの回路をもっていたのか、という問題意識に対し、加

越能郷友会の会員／非会員の属性の特徴とネットワークの様相を捉えることで描出しようと試みた。その結果、次の点が明らかになった。

加越能郷友会の会員となる典型的な属性は、学歴では、帝大と軍関係学校、職業では、高級官僚、高級軍人、大学教員、会社役員であり、反対に、私学や中等学歴出身者、商工業や農業従事者は郷友会には縁遠かった。世代別にみれば、明治末期に旧制中学校を卒業した新しい世代は、それ以前の古い世代に比べ郷友会に無関心になっていく傾向が認められた。

また、機関雑誌の記事や言説からは、同郷ネットワークが首都圏を中心に各地に張り巡らされ、学閥、職業の差異を乗り越えて、強い精神的紐帯で結ばれていたと受け取られるかもしれない。もちろん、郷友会は、明治中期のアノミックな状況の中で旧身分や出身背景を無化し、学歴エリートとしてのアイデンティティ確立に一定の役割を果たしたことは否めないし、また、欧米のクラブやサロンのような職種横断的な知識人サークルとして発展する可能性もあった(事実、クラブを模した「加越能倶楽部」が設立されている)。ところが、その後の発展と停滞の歴史において、このネットワークは、依然として高学歴層や高級官僚や軍人を中心とした一部の人間にのみ開かれ、未来志向ではなく過去への懐古へ、後進者を導くガイダンスではなく修養の勧めとして、機能するようになった。さらに、各会員の主観的意味世界の分析からも、コネクションの開拓や成功マニュアルの提示などの支援を受けられない苛立ちと、特に先輩人士との深い関係を取り結べないことへの嘆きが強く表出され、近代セクターへ進出していった流動エリートの孤独な側面が改めて浮き彫りになった。

同郷意識に基づく「絆」は各人の所属するそれぞれの身近な学閥や同窓集団、職業集団の中で——丸山(1961)の言を借りれば機能集団ごとの「タコ壺」の中で——親密に取り結ばれたのであろうが、明治後期以降に大量発生する「流動エリート」をはじめとする中流階級の精神的文化的統合は、“望郷の念”を仲介とする同郷アイデンティティをもってしても、困難な道のりであったのである。

〈注〉

- (1) 園田(1999)は、日本では「上層」中流階級が社会階級としては形成されず、これに代わって生まれたのが「エリート」(＝組織上の希少な地位を占める者)という存在であった、と指摘している。
- (2) 金沢一中卒業生データについては、井上(2003, 2005)を参照。

近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク

- (3) 「他の職業」からの輩出率0.18という値は金沢一中「721人」全体の平均輩出率(0.09)に比べ相当高いことに留意しておきたい。
- (4) 同一覧には、石川県の大正14年の多額納税者上位90人が、廣海二三郎(9705円, 江沼郡)を筆頭に、中田岩次郎(935円, 金沢市)まで記載されている。
- (5) 他の加越能育英社会への資金援助者は、前田侯爵家と石川県である。
- (6) 戦後社会においても、独力で会社を興した成功者の多くは学歴が高くない。代表的な研究として、麻生による『人事興信録』(1975年版)を用いたエリートの研究がある。これによれば、「セルフヘルプのビジネスエリート」(最終学校卒業後、自分で会社を興し、エリート的地位を築いた者)の学歴は、その80%までが高等教育学歴を欠いている(麻生 1991, 270頁)。

〈文献〉

- 麻生 誠 1991, 『日本の学歴エリート』玉川大学出版部。
- 川西英通 1992, 「在郷青年会の位置と論理」『天皇制国家の統合と支配』文理閣。
- 1996, 『近代日本の地域思想』窓社。
- 井上好人 2003, 「金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動」『教育社会学研究』第73集。
- 井上好人 2005, 『近代日本における地方名士の形成—北陸地方の中等教育からみた社会移動分析—』(平成15・16年度科学研究費補助金研究成果報告書)。
- キンモンス, E. H. 1995, 『立身出世の社会史』広田照幸, 他訳, 玉川大学出版部。
- 丸山真男 1961, 『日本の思想』岩波書店。
- 成田龍一 1998, 『「故郷」という物語』吉川弘文館。
- 園田英弘 1999, 「近代日本の文化と中流階級」『近代日本文化論 5 都市文化』岩波書店。
- 竹永三男 1985, 「県人会・郷土雑誌考」『山陰地域研究』1号。
- 竹永三男 1988, 「同郷会の成立」高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学』真陽社。
- 竹内 洋 1991, 『立志・苦学・出世』講談社現代新書。

〈付記〉

小論は、金沢星稜大学の研究助成(課題:「地方メディアからみた近代日本の「学生」の形成～身体・ハビトゥスの葛藤と変容～」)による研究成果の一部である。

ABSTRACT

**Hometown Networks of “Moving Elites” in Modernizing Japan:
Analysis of the Kaetsuno Association and
its Organizational Publications**

INOUE, Yoshito

(Kanazawa Seiryō University)

Ushi 10-1, Goshō Town, Kanazawa City, Ishikawa Pref., 920-8620, Japan

Email: inoue@seiryō-u.ac.jp

In modernizing Japan, people from rural districts came to occupy many important positions in government officials, elite professionals and employees of private corporations in the metropolitan areas (major cities). They are called “Moving Elites.” Considering that these “Moving Elites” moved away from their hometowns to live near their workplaces, the author decided to examine the types of social networks they established in the cities where they lived with people other than their classmates at school and colleagues at work. The paper aims to determine the method of communication used by the “Moving Elites” with others in different professions in the cities where they worked and the differences in methods of communication between people in their hometowns and those in the cities where they worked. Based on this question, this thesis focuses on the “Kaetsuno Association,” which was established by people from Ishikawa and Toyama prefectures at the beginning of the Meiji Period and was active until the beginning of World War II. This thesis uses, as the target of analysis, people who graduated from junior high schools and high schools in the Meiji Period. The characteristics of the human networks of “Moving Elites” are examined, for both members and non-members of the association. The results are as follows.

1. The people who became members of the Kaetsuno Association were graduates from imperial universities and military related schools in education, who took jobs as military officers, teachers and government officials. On the other hand,

graduates of private institutions of higher education, who worked in commerce, manufacturing industries and farming, had only a peripheral relationship to the association.

2. From a generational viewpoint, there was a tendency for individuals from the newer generation who graduated from junior high schools under the old education system at the end of Meiji Period to show little interest in joining the association compared to members of older generations.

3. Although members of the association actively discussed their hometowns and the characteristics of people from their home regions, the purpose of the discussions was not to unify people from the same districts, but to reveal anxieties concerning their identities in the cities, frustrations when their opportunities for promotion at work decreased, and even their communication problems with others. It is totally impossible to conclude that the association was able to create a situation that resembled the cultural unification of “upper groups of middle class people,” despite the fact that they were originally from rural districts. Only the aspect of the isolation of “Moving Elites” stood out in the association.